SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

アプローズ、アプローズ！ 囚人たちの大舞台

2020年／フランス映画
配給：リアリーライクフィルムズ／105分

2022（令和4）年8月2日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　2022－92

監督：エマニュエル・クールコル
出演：カド・メラッド／マリナ・ハンズ／ロラン・ストッカー／ダヴィッド・アヤラ／ラミネ・シソコ／ソフィアン・カメス／ピエール・ロッタン／ワビレ・ナビエ／アレクサンドル・メドヴェージェフ／サイド・ベンシナファ

みどころ

今は亡き、ちあきなおみの『喝采』（７７年）は、３分間の歌謡曲には珍しいストーリー性豊かな名曲だったが、「アプローズ」（＝拍手喝采）を２つも重ねた本作は？

“自由の国”フランスでは、女性の権利のみならず、囚人の自由度も日本より数段上。それはわかるが、本作の主人公は『ドライブ・マイ・カー』（２１年）並みの舞台演出家だから、ビックリ！彼はなぜ刑務所へ？なぜ有名な“不条理劇”『ゴドーを待ちながら』の演出指導を？

岡村孝子がデュオ“あみん”で大ヒットさせたデビュー曲『待つわ』（８２年）は、愛する人をずっと待ち続ける切ない女心を歌った名曲だが、本作の主人公は、なぜ華のオデオン座の公演で、待たされ続けるの？

「ラスト２０分。感動で、あなたはもう席を立てない！」、かどうかは、あなた自身の目でしっかりと！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■刑務所を舞台になぜアプローズが！？■□■

網走刑務所には高倉健がよく似合うが、それは彼が映画『網走番外地』（６５年）を大ヒットさせた俳優だからだ。網走刑務所をはじめとする、世界の有名な刑務所からの脱走劇を描いた面白い映画は多い。しかし、刑務所を舞台とし、『アプローズ、アプローズ！』をタイトルとした本作は一体ナニ？

アプローズとは“拍手、喝采”のこと。したがって、「アプローズ」とタイトルされた映画や漫画は多い上、大阪市北区には「ちゃやまちアプローズ」と名付けられた複合商業施設もある。また、ちあきなおみが歌って大ヒットした『喝采』（７７年）はストーリー性たっぷりの名曲で、日本の歌謡史上に残る最高傑作の１つだ。

そうすると、『アプローズ、アプローズ！』と２度も繰り返すタイトルの本作では、ひょっとして刑務所内で割れんばかりの拍手喝采が・・・？本作のチラシには「ラスト２０分。感動で、あなたはもう席を立てない！」とあるが、それは一体なぜ？

■□■演出家あれこれ！俺がなぜこんな演出を！？■□■

『ドライブ・マイ・カー』（２１年）（『シネマ４９』１２頁）の主人公は、妻と死に別れた舞台の演出家、その脚本は村上春樹の原作（短編）『ドライブ・マイ・カー』『シェエラザード』『木野』を、濱口監督が１本にまとめたものだった。同作の主人公は国際演劇祭での舞台演出のために広島に向かったが、本作冒頭は刑務所の演劇ワークショップに参加した中年男エチエンヌ（カド・メラッド）が、刑務所の案内を受けるシークエンスから始まる。売れない俳優兼演出家であるエチエンヌにとって、５００人の囚人の中から抜擢された５人の囚人を舞台に上げて芝居をさせるという今回の仕事は、本音を言えばやりたくない・・・？しかし、金のためにはやむを得ず・・・？

エチエンヌの下に集まった俳優は、①誤って殺人を犯したムサ（ワビレ・ナビエ）、②恐喝で捕まったパトリック（ダヴィット・アヤラ）③軽犯罪を繰り返すうちに犯歴が重なったジョルダン（ピエール・ロッタン）、④麻薬の売人アレックス（ラミネ・シソコ）、⑤知的で演技力もある牢屋主のカメル（ソフィアン・カーム）の５人。それぞれ個性的だが、肝心の演技力は？

■□■こんな名作を！？いや、これなら！そのテーマは？■□■

エチエンヌが選んだ演目は、劇作家サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』。これは、２人の人物が、なかなかやってこないゴドーを待っている間、さまざまな議論や出会いを繰り広げる“不条理劇”。エチエンヌはなぜ、こんな名作を選んだの？それは、人によって解釈が異なるこの戯曲が、出所する日を待ちわびる囚人たちの忍耐、絶望、虚無感を代弁するにふさわしいとエチエンヌが考えたためだ。

本作前半は、扱いにくい５人の囚人＝俳優に、エチエンヌが『ゴドーを待ちながら』の演出をつけていく風景が描かれるが、それが一筋縄でいかないのは当然。セリフを覚えるという基礎作業すらロクにできないこんな連中を、エチエンヌはどうやって演出するの？ちなみに、刑務所内での演劇の実施に力を尽くすのは刑務所長のマリアンヌ（マリナ・ハンズ）だが、１回目の上映が大成功を収めるまでにはさまざまな紆余曲折があるので、本作前半ではそれに注目！

■□■囚人の自由度は？緊張感の源泉は？■□■

選抜された囚人たちを舞台に上げ、その練習や本番に精を出させることによって囚人全体の更生を促す。それがマリアンヌの狙いだ。本作の刑務所風景を見ていると、フランスの囚人は日本の囚人たちより格段に自由度が高いことがわかる。もっとも、そうは言っても、稽古を重ねて舞台に上がり、観客のアプローズを浴びても、刑務所に戻れば５人の俳優たちは囚人に逆戻り。したがって、彼らに届けられた花束や贈り物すら自由に手にする

ことはできず、監守から屈辱的な取り扱いを受けるだけ。所詮囚人は囚人だ。

そんな経験を重ねれば、５人の囚人たちにとって、舞台への出演は脱走するための絶好の機会！なぜ今までそれに気がつかなかったの？そんな思いで、ある日５人は大脱走を決行！舞台の幕が上がる直前に５人の俳優たちの姿を見失ったエチエンヌが困惑したのは当然だが、さあ、その結末は？それは中盤の１つのハイライトになるので、あなた自身の目でしっかりと。

『ドライブ・マイ・カー』に見た主人公の演出のつけ方は、浜口監督のワークショップのやり方を踏襲したもので、かなりの緊張感を伴っていた。本作に見るエチエンヌの５人の囚人たちへの演出（指導）はそれとは全く異なるものだが、俳優がすべて囚人という“特異性”があり、脱走と表裏一体の環境であるため、その緊張感に注目！

■□■公演旅行は大成功！遂にオデオン座での公演が決定！■□■

本作中盤ではエチエンヌの演出によって５人の囚人たちが演じる『ゴドーを待ちながら』が大ヒットし、フランス各地で公演旅行を続ける風景が描かれる。エマニュエル・クールコル監督はその中で『ゴドーを待ちながら』の様々なシーンを見せてくれるので、『ゴドーを待ちながら』の舞台を見たことがない人でも、それとなくその“不条理劇”としての面白さを理解できるはずだ。

その第１幕は、ウィキペディアによると、次のとおりだ。すなわち、

> 第１幕ではウラディミールとエストラゴンと言う２人の浮浪者が、ゴドーという人物を待ち続けている。２人はゴドーに会ったことはなく、たわいもないゲームをしたり、滑稽で実りのない会話を交わし続ける。そこにポッツォと従者・ラッキーがやってくる。ラッキーは首にロープを付けられており、市場に売りに行く途中だとポッツォは言う。ラッキーはポッツォの命ずるまま踊ったりするが、「考えろ！」と命令されて突然、哲学的な演説を始める。ポッツォとラッキーが去った後、使者の少年がやってきて、今日は来ないが明日は来る、というゴドーの伝言を告げる。

第２幕も似たような展開だが、ゴドーが実際に何者であるかは劇中で明言されず、解釈はそれぞれの観客に委ねられるところがミソ。本作が“不条理劇”と言われるのは、そのため（わけのわからないため）だが、本作における５人の囚人たちの演技を見ていると、普通の俳優が演じるよりも、より深淵な気持ちになってくるから不思議だ。しかして、なんと、そんな素人芝居に対して、パリのオデオン座から最終公演のオファーが届いたからビックリ！

２０１２年には米倉涼子がブロードウェイのミュージカル『CHICAGO』に出演したことが大きな話題になったが、オデオン座からのオファーはそれと同じレベルの話題（?）だから、エチエンヌが喜び勇んだのは当然。５人の囚人たちも、会場を下見したところでは大いに感動していたから、きっと本番では大熱演！そして観客からは「アプローズ、アプローズ！」の大合唱が！一瞬、そんな風景が目に浮かんだが・・・。

■□■圧巻のラスト２０分！そこでは一体ナニが？■□■

本作のチラシには、一方で「(刑務所を舞台にした) 近年最高のフランス映画！」「非の打ちどころのない、完璧な作品。」等の文字が踊り、他方で「この映画はスウェーデンの実話をベースに映画化された！」と書かれている。つまり、本作はスウェーデンの俳優ヤン・ヨンソンが１９８５年に体験した実話をベースにしているそうだ。しかして、その実話とは一体何？

私は岡村孝子の『夢をあきらめないで』(８７年) が大好きで、バブルの頃はカラオケでよく歌っていた。その岡村孝子が同級生の加藤晴子と２人でデュオを組み、「あみん」の名前でデビューした時にヒットさせた曲が『待つわ』(８２年) だった。これは愛する人をじっと待ち続ける女心を歌った切ないものだが、本作ではオデオン座に大勢の観客が押し寄せ、今や遅しと開演を待つ中、舞台の袖に５人の演者の姿が見えないことに狼狽するエチエンヌの姿が映し出される。これは、あの時とまったく同じ風景！ならば、彼らは直前に戻ってくるはず、エチエンヌは心のどこかでそう期待したが、さて・・・。この時のエチエンヌの気持ちはまさに「待つわ」の気持ちそのものだったはずだ。しかし、開演時刻を過ぎても結局５人は姿を見せなかったから、やむなく、エチエンヌは１人で舞台に上り、コトの一部始終の説明 (弁明) を始めることに。なんだ、この映画は？こんな結末になって、なぜ「ラスト２０分。感動で、あなたはもう席を立てない！」の？

弁護士として５０年近く時間厳守をモットーにしてきた私は、人を待たせるのが嫌いなら、人を待つのも大嫌い。中学時代に読んだ獅子文六の小説『海軍』で、かつての日本海軍に“５分前”という“海軍時間”なるものがあったことを学んだ私は、以降それを実践している。しかし、人生は何事もそのように行くわけではなく、待たされることも多い。誰もがそう思うはずだが、本作ラストでイライラしながら待たされるエチエンヌの気持ちは如何に？しかして、そこから始まる本作の大どんでん返し、あっと驚く結末は？

それについては当然ネタバレ厳禁だから、あなた自身の目でしっかりと！なるほど、これが「ラスト２０分。感動で、あなたはもう席を立てない！」ということか。なるほど、なるほど・・・。

２０２２（令和4）年8月4日記